

## 序

西域は是れ佛教興隆し、三寶流通せる故地なり。殊に新疆の地たるや、印度と支那との通路に當り、兩地文化の接觸せし處にして、又實に佛法東漸の衝衢たり。然れども此地に於ける教法の衰亡は既に久しき以前にして、往昔の狀況今や得て知るべからず。予夙に此地を始めとして所謂中央亞細亞に對する學術的踏査の忽諸に附すべからざることを知ると雖、其實行の機會に至りては、之を獲ること能はざりしもの久し。明治三十五年八月、予會英國倫敦に在り、將に故山に歸らんとするに當りて謂らく、此歸途を利用して予が素志の一端を達せんに如かずと。遂に意を決して自ら西域の聖蹟を歴訪し、別に人を派遣して新疆の内地を訪はしめたり。這次旅行の結果は予をして中央亞細亞探究の愈、必要なるを悟らしめたれば、予は更に此目的の爲めに、第二第三の兩回に互りて人を派遣するに至れり。試にこの兩三次に於ける旅程の概要を摘録すれば左の如し。

第一回の旅行に於ては予と渡邊哲信、堀賢雄、本多惠隆、井上弘圓とを合せたる一行五人を以て、明治三十五年八月十五日倫敦を出發し、露國を經由して裏海沿岸のパークに入りしは同年九月なりき。次でサマルカンド、コーカンドを経てオッシュに至り、テレック嶺を越えて喀什噶爾に入り、更に葉爾羌に至り、路を轉じて葱嶺中の一都會たる塔什克爾罕に入れり。是れより予は本多惠隆、井上弘圓を隨へてミンタカ嶺を越え、フンザ井にギルギットを経てカシミアールに向ひ、更に印度各地の聖蹟を訪ひて本邦に歸れり。又渡邊哲信、堀賢雄の二人は塔什克爾罕に於て予の一行と分れ、カンドル嶺を越えて再び葉爾羌に歸り、更に路を東南に取りて喀拉噶里克に入り、グマを過ぎて和闐に達したるは十一月二十二日なり。兩人は此地に於て越年し、明治三十六年一月二日和闐を出發して路を北方に取り、和闐河の流域に沿うて進み、阿克蘇に達す。それより路を西方に轉じ、烏赤吐魯番(烏什)を経て二月二十日再び喀什噶爾に歸れり。三月五日、更に喀什噶爾を發して阿克蘇に向ひしも、前の通路を避けて瑪拉爾巴什に進み、阿克蘇及び拜を過ぎて四月二十三日庫車に到着す。一行は此地に留まること三箇月、以て附近の赫色勒、伯什克拉克木、哈薩塔木等の踏査と發掘とに従事せり。八月十一日此地を出發し、克爾勒を経て托克遜に至り、次で吐魯番に著す。此地に於ても亦發掘を試み、後去つて烏爾木齊古城を過ぎ、哈密を経て甘肅省に入り、遂に西安府に達す。時に明治三十七年二月二十九日なり。

第二回の旅行は明治四十一年より同四十二年に互り、之に従事せるは橘瑞超、野村榮三郎の二人なり。一行の北京